The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「を」の接続表現の諸相
Author(s)	山口, 堯二
Citation	語文. 1978, 34, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68639
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「を」の接続表現の諸相

山口堯二

一

「を」の接続表現の成立と、万葉における表現性の特色については、すでに拙稿「『を』の接続表現――成立と万葉における表現性――」[1]（以下、前稿と呼ぶ）に私見を述べた。本稿では、上代・中古にわたる「を」の接続表現の諸相をやや細かく検討する。

「を」による接続表現の前句には、「連体成分（逆述語）＋体言＋を」といういわば喚体句的形式が見られる。[2]「を」の接続形式は格助詞「を」の機能を前提として成立したと考えられ、これはその成立に由来するものと思われる。前句の喚体句形式は、上代に限らず中古にも例が見られる。上代の例と併せて示そう。

明日香川行く瀬を速み早けむと待つらむ妹乎この日暮らしつ
（万葉―十一―二七一三）

いく世しもあらじ我身をなぞもかくあまのかるもに思ひみだるる
（古今―雑下―九三四―読人しらず）

なかりしもありつつかへる人の子をありしもなくてくるがかなしさ
（土左）

よろづ世にかゝらむつゆををみなへしなに思ふとかまだきぬるらん
（後撰―秋中―二八二―大輔）

和歌には、主語述語を明らかにした通常の述体句形式の前句にも体言に「を」を直接下接させた例が見られる。和歌という形式上の制約から、その体言下接の簡潔さだけを利用した感じがこれらには強い。

しらつゆの色はひとつをいかにして秋のこのはをちゞにそむらん
（古今―秋下―二五七―敏行）

人の身もならはしものをあはずしていざ心みん恋ひや死ぬると
（古今―恋一―五一八―読人しらず）

わびわたるわが身はつゆをおなじくは君がゝきねの草ときえなん
（後撰―恋二―六五〇―つらゆき）

しかし、喚体句的な形式の前句（倒置または後句省略の場合を含める）は、中古の散文にも時に見られる。

絵に書きたる楊貴妃のかたちは、いみじき絵師といへども、筆かぎりあればいとにほひなし。太液の芙蓉・未央の柳もげにかよひたりしかたちを、唐めいたる粧ひはうるはしうこそありけめ、なつかしうらうたげなりしを思ひいづるに、花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。（源氏―桐壺）

内にも聞こしめして、「あはれ、いかに物をおぼしつらむ。げにあるべくもあらず思ほしたりし御有様を」と、あはれに悲しうおぼしめさる。　（栄花―とりべ野）

「を」の接続表現には強調的な「ものを」形がよく用いられるが（理由は前稿に述べた）、その「もの」も本来はもちろん体言である。そこから類推すれば、これらの体言下接の表現も、一面「ものを」に通じる思い入れを感じさせる言い方ではなかったかと思われる。

ここで、「を」に接続された前後両句の意味関係に視点を移す。

二

上代には、前句を根拠にして、後句が話手の不満・困惑・反発・悔恨などの情意を担わされている例が多い。まとめて言えば、現実忌避的とでも呼べそうな情意である。両句がそういう意味関係にあるものを、忌避性と呼ぶことにしよう。忌避性の表現には、その意味をより強調的に表すべく、「ものを」形もしばしば用いられた。それも含めて、次に上代の例を示す。

吾が恋を夫は知れる遠行く船の過ぎて来べしや言も告げなむ
（万葉―十―一九九八―人麻呂歌集）

かく恋ひむものと知りせば吾妹子に言問はまし乎今し悔しも
（万葉―十二―三一四三）

百日しも行かぬ松浦路今日行きて明日は来なむ遠何かさやれる
（万葉―五―八七〇―憶良）

思はじと言ひてし物乎はねず色の移ろひやすき吾が心かも
（万葉―四―六五七―坂上郎女）

かくのみにありける物乎妹も吾も千歳の如くたのみたりける
（万葉―三―四〇七―家持）

逢はむ夜はいつもあらむ乎何すとかかの夕逢ひて言の繁きも
（万葉―四―七三〇―坂上大嬢）

前の聖武天皇の皇太子と定め賜ひて、天つ日嗣高御座の坐に昇げ賜ふ物乎、いかにか恐く私の父母兄弟に及ぶ事得む。甚恐し。
（二五詔）

忌避性の表現は中古にも少なくない。「ものを」形も併せ示す。

ちるとみてあるべき物を梅の花うたてにほひの袖にとまれる
（古今―春上―四七―素性法師）

なびく方有ける物をなよ竹の世にへぬ物と思ける哉
（後撰―恋五―九〇七―よみ人しらず）

あはれとも思はじ物をしら雪のしたにきえつゝ猶もふるかな
（拾遺―恋一―六五三―よみ人しらず）

かう〳〵今はとてまかるを、何事もいさゝかなることもえせで遣はすことと書きて　（伊勢―一六段）

しばしは忍びたるさまに「うちに」などいひつゝぞあるべきを、いとゞしう心づきなくおもふことぞかぎりなきや。
（蜻蛉―上）

さらにかやうのすきずきしきわざ、ゆめにせぬものを、わが家におはしましたりとてむげに心にまかすなめり。
（枕―大進生昌が家に）

年ごろうれしくおもだたしきついでにてたち寄り給ひし物を、かゝる御消息にて見たてまつる、かへす〴〵つれなき命にも侍るかな。
（源氏―桐壺）

わざと御車など思しめぐらしてたてまつれ給へるを、空しくて

はいといとほしうなむ。（源氏―蜻蛉）

「を」の接続表現には、上代以来そこで言いさしにして続くべき後句を表現しないことがよくある。暗示的な言い方である。その際、暗示されるのも、すでに挙げた例に通じる忌避的な情意であることが多い。たとえば次のように。

吾が背子し遂げむと言はば人言は繁くありとも出でて逢はまし乎

（万葉―四―五三九―高田女王）

つゐにゆく道とはかねてきゝしかどきのふけふとはおもはざりしを

（古今―哀傷―八六一―業平）

よくもあらぬかたちを、深き心を知らで、あだ心つきなば、後くやしき事もあるべきを、と思ふばかりなり。（竹取）

いとおもはずにのみぞ世はありける。さいはひある人のためには、年月みし人もあまたの子どもたらぬを。かくものはかなくて、おもふことのみしげし。（蜻蛉―上）

三

「を」の接続表現は逆接から順接にまたがる。その順接関係は、忌避性の表現における前句が、同じ現実忌避の情意から、禁止・命令・希望・意志などの、より能動的な情意の志向を示す後句を導く時、結果的に成立したものであろう。前句の意味と対立的な現実を否定する形で導かれるその後句には、いわば対立の対立としての順接関係が前句との間に成立するからである（前稿参照）。そのような後句を導くものを志向性と呼ぶことにする。

上代の志向性には、口語訳をするにも「ので・から」よりむしろ「のに」の適合する例が多い。それだけ両句の関係には、いわば逆接に媒介されている感が強い。両句は深く断れて続いていると言えそうである。

次にそのような例を示そう。中古の同様な例も併せ掲げる。

今こそは我鳥にあらめ　後は汝鳥にあらむ遠　命はな死せたまひそ

（記歌謡―三）

闇の夜は苦しき物乎いつしかと吾が待つ月もはやも照らぬか

（万葉―七―一三七四）

世の中の常なきことは知るらむ乎情尽くすなますらをにして

（万葉―十九―四二一六―家持）

ちりぬれば恋ふれどしるしなきものをけふこそ桜折らば折りてめ

（古今―春上―六四―よみ人しらず）

ちりちらずきかまほしきをふる里の花見てかへる人もあらなん

（拾遺―春―四九―伊勢）

このようになお逆接性の強い志向性の両句が、次のように倒置の関係にある場合は、志向的な単文と忌避性との二文としても、ほとんど同等に理解できる。前述のように忌避性自体、続くべき後句を暗示して終わることが少なくないからである。志向性と忌避性との連続性を最もよく示す例になろう。

朝寝髪吾は梳らじうるはしき君が手枕触れてし鬼尾

（万葉―十一―二五七八）

秋のきくにほふかぎりはかざしてん花よりさきとしらぬわが身を

（古今―秋下―二七六―貫之）

なほ「例の人のやうに、これなかくないひわらひそ、いときんこうなるものを」と、いとほしがらせ給ふもをかし。

（枕―大進生昌が家に）

次の例には、人々が畏敬の念をもって富士を仰ぐことを当然のことと確認主張する情意が暗示されており、志向性の後句省略と見られる。

富士の嶺を高みかしこみ天雲もい行きはばかりたなびく物緒

（万葉―三―三二一―虫麻呂歌集）

ところで、中古になると、忌避性とのつながりを思わせないより緊密な順接といえる志向性の例も現れる。次のごときは、もし逆接の含みがあるとしても、もはや明らかには認めがたいといってよかろう。

人の身もならはしものをあはずしていざ心みん恋ひや死ぬると

（古今―恋一―五一八―よみ人しらず）

あらはになどもあるべうもあらぬを、夜のまにわたれ。

（蜻蛉―上）

わが御世もいと定めなきを、たゞ人にておほやけの御後見をするなむ、行く末も頼もしげなることと思し定めて

（源氏―桐壺）

「……この扇のたづねまほしきゆゑありて見ゆるを、猶このわたりの心知れらむ者を召して問へ。」とのたまへば

（源氏―夕顔）

「今はかくて下りゐなんとおぼすを、さるべき様に掟て給へ。」と仰せらるれば

（栄花―いはかげ）

順接と言えば、その代表的な形式は確定表現の「ば」であるが、「ば」は、次のように与えられた明らかな事実を後句に据えて、その原因理由を述べることができる。

朝柏閏八河辺の小竹の目の偲ひて寝れ者夢に見えけり

（万葉―十一―二七五四）

ゆふされば衣手さむしみよしののよしのの山にみゆきふるらし

（古今―冬―三一七―よみ人しらず）

しかし、「を」の接続表現には、中古にもこのように明らかな事実を後句にしていると見るべき確かな例はない。同じく順接とはいえ、「を」と「ば」との間にはそれだけ表現性の差があるということである。確定条件を表す「ば」の前句となるのは、客観的な事柄であるが、「を」はたとえ外界の事象でも、それを話手の主観に包摂して表現するといった差がありそうに思われる。その事態を主体の判断に即して表現する意味あいが強いと言い換えてもよかろう。「を」は推量辞「じ」「まし」にもよく下接して用いられるが、確定の「ば」はそれらに下接しえない（「ましかば」は仮定である）。「を」の主観性・即判断性はそういう点からも指摘できよう。これは志向性の表現に限らない「を」の接続表現全体の傾向でもあるが、順接になる場合の後句が志向的であるのもその傾向に照応するものである。

前句を根拠にして現実への忌避的情意を導く忌避性と、より能動的な志向を導く志向性とにおける両句の関係は、いわば目的論的であり、確定の「ば」に見られるような、与えられた事態についての因果論的な関係表示にはなじまなかったであろう。

四

「を」の接続表現は、対立的な事態を後句に導くことが多い。先述の忌避性における後句も、それが担う忌避的情意は前句の事態や

判断と対立する現実を対象とするものであった。しかし、両句の事態が様相において対立的に表現されているものには、忌避的な情意を伴わない例が多い。そこで、様相的に対立する事態の接続表現を一まとめにして、それを対立性と呼ぶことにする。

対立性の中には、狭義の様相上の対立を示す例(a)のほか、因果関係に照らしての対立を示すと見られる例(b)がある。しかし、後者の例は少ない。

まず上代の例を(a)(b)別に、「ものを」形も併せて掲げる。

(a)常はさね思はぬ物乎この月の過ぎ隠らまく惜しき夕かも
(万葉—七—一〇六九)

山のまの雪は消ざる乎みなぎらふ川のそひには萌えにけるかも
(万葉—十—一八四九)

よそにのみ見ればありし乎今日見ては年に忘れず思ほえむかも
(万葉—十九—四二六九—聖武天皇)

いささかに思ひて来し乎多祜の浦に咲ける藤見て一夜経ぬべし
(万葉—十九—四二〇一—久米広縄)

(b)門たてて戸もさしたる乎いづくゆか妹が入り来て夢に見えつる
(万葉—十二—三一一七)

このような対立関係は、逆接確定条件を表す「ど・ども」によっても表現されたものである。「ど・ども」も、たとえば次のように狭義の様相の対比(a)にも、因果関係に反する対立的表現(b)にも用いられた。

(a)去年見てし秋の月夜は雖レ照相見し妹はいや年さかる
(万葉—二—二一一—人麻呂)

(b)あらたまの五年雖レ経吾が恋ふる跡なき恋の止まなくも怪し
(万葉—十一—二三八五—人麻呂歌集)

このような「ど・ども」の確定表現は、意外さ・不可解さなどの気持を表すことが多い点でも、「を」の対立性に似ている。その意味で、「を」の対立性は「ど・ども」の逆接確定表現と類義性をもつということができよう。しかし、ここでも両形式の間には、先に志向性と「ば」の順接確定表現との差を指摘したのと同様のことが言えるだろう。「ど・ども」は「を」にくらべてはるかに客観的な表現性にすぐれる。「を」は推量辞「じ」「まし」によく下接するが、「ど・ども」は下接しえないのである。

上代には対立性独自の用例(忌避性と重複しないもの)はまだあまり目立たない存在といえるが、中古にはこの種の例が俄然多くなってくる。まず和歌の例を示そう。(a)は狭義の様相的対立、(b)は因果論的対立と見うる例である。

(a)ふたつなき物と思ひしをみなそこの山のはならでいづる月かげ
(古今—雑上—八八一—貫之)

いつとても月見ぬ秋はなき物をわきて今夜のめづらしき哉
(後撰—秋中—三二五—藤原雅正)

身ははやくなき物のごと成りにしをきえせぬ物は心なりけり
(後撰—雑三—一二一四—伊勢)

花ちるといとひし物をなつごろもたつやおそきと風をまつかな
(拾遺—夏—八二—盛明のみこ)

水のうへとおもひし物を冬のよのこほりは袖のものにぞありける
(拾遺—冬—二三三—読人しらず)

時のまも心はそらになるものをいかですぐししむかしなるらん

（拾遺—恋四—八五〇—実方）

たち花の小島は色も変らじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ

（源氏—浮舟）

かかる（ウレシイ）世もありけるものを限りとて君に別れし秋はいかにぞ

（更級）

(b)しらつゆの色はひとつをいかにして秋のこのはをちゞにそむらん

（古今—秋下—二五七—敏行）

雨ふれど露ももらじをかさとりの山はいかでかもみぢそめけん

（古今—秋下—二六一—元方）

中古には、散文にもこの種の用法がきわめて多い。他の類にくらべて、最も多いのがおそらくこれであろう。ただし、散文には狭義の様相的対立の例ばかりで、因果論的な対立性の確かな例は見えない。

くに人の心のつねとしていまはとて見えざなるを、心あるものは恥ぢずぞなんきける。（土左）

父はこと人にあはせむといひけるを、母なんあてなる人に心つけたりける。

（伊勢—一〇段）

世の中の例として思ふをば思ひ、思はぬをば思はぬ物を、この人は思ふをも思はぬをもけぢめみせぬ心なんありける。

（伊勢—六三段）

その物いそぎ給ける時は、まもなくこれよりもかれよりもいひかはしたまひけるを、それよりのちはその事とやなかりけん、消息もいはでしはすのつごもりになりにければ（大和—三段）

「翁丸か」とだに言へば、喜びてまうで来るものを、呼べど寄り来ず。あらぬなめり。（枕—上にさぶらふ御猫は）

ときのままおぼつかなかりしを、かくても月日は経にけりとあさましう思し召さる。（源氏—桐壺）

（源氏ハ）うるはしだちてはかゞしきかたに見れば、いみじくあざやかに目も及ばぬ心ちするを、又うち解けて戯れ言をもいひ乱れ遊べば、そのかたにつけては似る物なく愛敬づき、なつかしくうつくしきことの並びなきこそ世にありがたけれ。

（源氏—若菜上）

因果論的な対立性の表現が歌には見られ、散文に見えないのは、なぜであろう。おそらく、「を」自体に因果論的な関係表示性が乏しいからである。このことは、志向性の所でも、「ば」との違いとして述べた。和歌に例を見るのは、本来「ど・ども」がふさわしい因果論的な対立関係の表現にも、和歌形式の制約から「を」ですまそうとする作意が働きやすいからであろう。その逆は考えにくい。「を」の接続表現が順接・逆接にまたがること自体、考えてみれば、その因果論的な関係表示性の乏しさを物語っていると言える。

対立性の用例は忌避性と重なりうるが、実は志向性とも重複する例がある。前句が次のように類推表現の根拠として用いられる場合がそれである。

をしむから恋しき物を白雲のたちなむのちはなに心ちせむ

（古今—離別—三七一—貫之）

こむといひてわかるゝだにもある物をしられぬけさのましてわびしき

（後撰—離別—一三四一—時平）

年だにも十とて四つは経にけるをいくたび君を頼み来ぬらん

（伊勢—一六段）

よろしきことにだにかゝる別れの悲しからぬはなきわざなるを、

ましてあはれにいふかひなし。（源氏―桐壺）

かゝる御気色なからむにてだに進み参り給ふべきを、ましてかう待ちきこえ給ひけるが心苦しきことと、参り給ふべきことおぼし設く。（源氏―若菜下）

これらの前句は、後句の事態の程度や質を当然のこととして類推させるための根拠に用いられている。同様な類推表現の前句が、次のように「ば」の確定条件句で表されることがあるのも、そのためである。

命長さのいとつらう思ひ給へ知らるゝに、松の思はんことだにはづかしう思ひ給へ侍れば、百敷に行きかひ侍らん事は、ましていとはゞかり多くなむ。（源氏―桐壺）

類推表現と見うる「を」の対立性の表現には、前句を根拠として後句の事態の程度・質を当然のこととと確認主張する情意がある。その意味で上述の志向性の表現とも重なっているといえよう。

なお、対立性は論理性の強い文体―文脈にも姿を現す。漢文訓読体の文章には一般に用いられないといわれる「を」の接続表現であるが、[3] 対立性の類は次のように訓読文にも顔を見せる。

久乃説是法(と)いふは(者)、成道(し)たまひて多年(にし)テ(せ)シカドモ、曾て説(き)顕(さむ)と(したまは)不ヲ、今方に之を説ハムトシテ、故レ久(し)と云へり(也)。（法華経玄賛―三―平安中期淳祐点）[4]

実に此の事は无(き)ものを、物に応(じ)て権に現ず。故に方便と言(ふ)。（同）

「を」の接続表現は、忌避性・志向性において情意性の強い表現に適応すると同時に、この対立性を代表として論理的な文の展開にも、それなりの使命を担ったといえそうである。

五

「を」の接続表現には、中古に入って意味的対立のいっそう軽い接続用法が現れる。たとえば、次の文中の「を」である。

そのみこ、女をおぼしていとかしこう恵みつかう給ひけるを、人なまめきてありけるを、我のみと思ひけるを、又人きゝつけて文やる。（伊勢―四三段）

これはひとりの女に懸想した男たちのありさまを、それぞれ簡潔に述べて一文とする。三回続く接続の「を」は、現代語「が」の軽い接続用法に近かろう。第一・二句は空間的に共存する事態であろう。第三句「我のみと思ひけるを」は、第二句と主語が等しく対等の関係にある。[5] それらは、ともに第四句「又人きゝつけて文やる」へと継起的につながる。しかし、これらの接続に「を」が用いられた所以は、共存とか継起とかいう関係には直接のかかわりはまずないであろう。接続関係にある各句は、内容からいえばむしろ共通するとさえ言える。ただし、主語は交替しているので、その点に軽い齟齬感を表そうとする意図は窺えようか。上述の対立性のように、接続関係にある各句に様相的な対立関係を認めた表現とは考えがたい。「を」が担っている表現性は、対立性におけるそれにくらべて、明らかにより抽象的であり、気分的でもある。極言すれば、各句の句としての抽象的な対立感を表示するために用いられているともいえそうなものである。

次も同様の例である。

朝忠の中将、人の妻にてありける人にしのびてあひわたりける

を、女もおもひかはして、かよひすみけるほどに

（大和—六段）

まして物の聞え隠れなき世の中に、大将殿わたりに骸もなく亡せにけりと聞かせ給はゞ、必ず思ほし疑ふ事もあらむを、宮はた、同じ御なからひにて、さる人のおはしおはせず、しばしこそ忍ぶともおぼさめ、つひには隠れあらじ。（源氏—蜻蛉）

第二例は、「大将殿」と「宮」と、どちらも浮舟の行方に同様の疑いを抱くだろうが、「つひには隠れあらじ」と思う右近の思惟を表す。[6] 主語は異なるが、内容は多分に共通する二句の接続に「を」が用いられているのである。

次の諸例も、前後の意味に目立つ対立感はない。見方によっては、むしろ共通ないしは類似する意味の表現を後続させているといえる。

むかし田舎わたらひしける人の子ども井のもとにいでてあそびけるを、大人になりにければ、男も女も恥ぢかはしてありけれど、男はこの女をこそ得めと思ふ。女はこの男をと思ひつゝ、親のあはすれども聞かでなんありける。（伊勢—二三段）

人にくかりし心に思ひしやうは、命はあらせてわが思ふやうにおしかへし物をおもはせばやと思ひしを、さやうになりもていで、はてはうみのゝしりし子さへ死ぬるものか。（蜻蛉—上）

かの人（＝匂宮）の、のどかなるべき所思ひ設けたりと昨日もの給へりしを、かゝること（＝薫ガ浮舟ヲ京ニ移スツモリデイルコト）も知らでさ思すらんよと、あはれながらも

（源氏—浮舟）

あやしあさましと思ひて（来年ノ除目ノ事ガ記サレタ紙ヲ）とりあげて、乾してをさめたりしを、かへる年の司召しに此の文に書かれたりし、一つも違はず此の国の守とありしままなるを

（更級）

このように両句の内容的な対立感が乏しく、互いに遊離的な句と句の接続は、逆接・順接という概念ではもはや処理しにくい。順逆を明らかにしない平板な接続関係であるという意味では、このような両句の接続は平接であるといえる。平接関係にある「を」の接続表現を齟齬性と呼ぶことにする。個々の例における前後の齟齬感には相当の程度差があり、句としての対立感を表示しているとしか言えないほど稀薄な用例もある。しかし、対立性との対照には、都合のよい点があろう。この類は対立性を母体に、その表現性をより拡散させ抽象化したものという関係にあると思われるからである。

齟齬性の例は和歌からも拾える。次のごときはそれと見てよかろう。

夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月やどるらん

（古今—夏—一六六—深養父）

上来述べてきた「を」の接続表現の主観性・即判断性は、この齟齬性の派生にとっても一因になったと思われる。強調的な「ものを」形は、齟齬性には現れない。

六

おわりに、本稿の要点をまとめておく。

一、上代・中古における「を」の接続表現を忌避性・志向性・対立性・齟齬性の四類に分けて捉える。忌避性は忌避的な情意を特徴とする逆接である。志向性は後句が希望・意志などの主体的な志向を表す。これは、上記の逆接を媒介として順接性をそなえるに至る。

対立性は主として様相の対立を示す。和歌には因果論的対立を示すに用いた例もある。対立性の用例には、忌避性と重なるものがあり、志向性とも類推表現において重複している。対立性は齟齬性の母体にもなったであろう。齟齬性は意味上の対立感に乏しく、両句の遊離性が目立ち、その接続は順逆を明らかにしない平接といえる。この類に限り、強調的な「ものを」形は現れない。

二、上代には、忌避性と志向性の用例が多い。志向性はまだ忌避性とすぐれて連続的であった。対立性の例は、まだ忌避性・志向性ほどには目立たない。中古には、志向性が忌避性と切れて順接関係が明らかになるほか、対立性の伸張が目立ち、齟齬性を加えて、上代より一段と多様化する。

三、「を」の接続表現は、対立性において「ど・ども」の逆接確定表現と類義的になるほか、志向性において「ば」の順接確定表現とも類義的になる。しかし、「を」の接続表現には事柄を主観に包摂し判断に即して述べる性格が強く、前句を根拠とする忌避性・志向性の両句関係は目的論的である。客観的な事態間の因果論的な表現性は乏しい。順接・逆接にまたがること自体も、そのことを窺わせるものである。「を」の主観性・即判断性は齟齬性の類を生じる一因にもなったと思われる。

注

(1) 『浜田教授退官記念国語学論集』、「国語国文」46巻5号昭和52年5月号。

(2) 「喚体」の語は、後に用いる「述体」とともに、山田孝雄『日本文法学概論』、森重敏『日本文法通論』などによる。

(3) 築島裕『平安時代語新論』。

(4) 中田祝夫『古点本の国語学的研究訳文篇』による。

(5) 「我のみと思ひけるを」には、第四句の「又人」がそう思っていたとする解釈もあるが、主語「又人」の位置と「を」の用法からみて不自然である。

(6) 「宮はた、同じ御なからひにて」以下も、「大将殿(=薫)」の心とする解釈もある。それなら対立感はいっそう乏しくなろうか。しかし、『玉の小櫛』に「(前略)匂宮も疑ひ給はんの意にて、宮はたといへる也、(後略)」と見ているのが、「を」の用法からも理解しやすい。

(昭和五十三年一月十五日)

(本学　助教授)